



フランス語が加わりさらに充実

今回もこの本をポケットに海外に旅立つ

「日-英独仏医学会話」(第2版)

菊地 博, 小篠 暉, 菅重卓郎 著

ちょうど欧米における医学研究に旅立とうとしている時に書評を依頼され、医学会話第2版を手にした。前回米国留学にさいしては本著初版を携行し、暇をみては自分に関係のありそうなところを拾い読みして便宜をえたことを思い出す。

私の語学は未熟で、書評を書くなどとてもないことだが、それゆえにこそこういう本に頼らねばならない立場から、その利用価値について、ものを言うことが求められたのかも知れない。

われわれの外国語は、反射的に出てくるという段階にはなかなかいたらない。昔の火縄銃のように、一発一発頭の中で準備してからぎこちなく発射するというのが、実情である。が、その填める材料を持たないことにはどうにもならない。そこで、多くの会話書が世に問われているが、医師と患者あるいは看護婦というような特殊な環境を中心としたものは少ない。

そういうところで多く聞かれる会

話について、各診療科ごとの参考例をあげてまとめた本書の価値は大きい。

もっとも、ポケットに入れてかさばらないことも一つの目標としたらしい小冊子であるから、すべての状況を想定した内容を盛り込むことはできなかったであろうが、読む方が一応外国語の基礎のある人々であるから、この本の中の事例を参考として広く応用することが可能であろう。

今回は英独語のほかに、フランス語が増補されている。海外旅行の機会が増え、一方国内においても外人との接触が多くなってきた今日、私もこれぐらいの国のことばは、まがりなりにも話せるようになりたいと希っている。いっきよにそこまでいかなくても、目の前の実用に迫られない診療の合間の趣味として、比較的近縁語であるこれらの3か国語を比べてみるのは、いささかおもしろいではなからうか。

しかし、私の場合フランス語がそ

うであるように、ほとんど自分に基礎のない新しいことばは、こういう類の書籍を手中に開いていても会話ができるものではない。将来さらに他国語も増補しようという著者らの考えには、せっかくの簡便さが失われる点で賛成しがたい。

著者の諸先生には個人的にもお会いしたことがあるが、これらのまじめな先生方が、それぞれの豊かな学識と長期海外留学の経験から書かれた本書は、類書の少ない折から時宜を得たものであろう。なお、校正を依頼されたそれぞれのことばを母国語とする方々の名前をどこかに掲げておかれば、本書の権威がさらに高められるのではないかと考える。

今回もまた、私はこの本をポケットにすることによって、いささかの安堵感をもって出発しようと考えている。(新書判, 頁177, ¥1100, 医学書院)

(熊本大学教授・麻酔学 森岡亨)